

社会教育とNPOの連携 パート2

阿部剛（任意団体CHIEの輪）

1. 実態と課題

松戸市における社会教育についての課題は多岐にわたるが、本稿ではNPO法人や市民活動団体などを代表とする市民による活動をどのように活かし、つなげていくことができるかをテーマとする。また特に課題が多い青少年に関する分野について取り上げていく。

< NPOにおける活動の課題 >

- ・様々な専門性を持っている反面、対象となる子どもの年齢層や抱えている課題が限定的になりやすい
- ・特に子どもや青少年に関わる分野の団体は資金面で不安定であることが多く、拠点となる場所や人材の確保がしづらい
- ・NPO同士でのネットワークを作る場がなく、また行政や学校とのつながりが少ないことに加え、情報の発信を苦手とする団体が多い
- ・運営者が本業の片手間で取り組んでいるケースが多く、常に人材不足の状態である

< 行政における取り組みの課題 >

- ・民間の団体などと連携するなどの事例は少なく、前年度の踏襲が基本となっているため、時代性を捉えた新しい事業に取り組みづらい
- ・学校や市民センターなどの公的な資源があっても、公平性・安全性の観点から、広く開かれることが難しい

2. コンセプトと目標設定

「松戸市の資源とNPOの活力をつなげる社会教育の拠点事業」

- ・空きスペースのある学校施設や公共施設、または廃校施設、地域の空き不動産、空地などを活用し、子ども達がいつでも集える拠点を作る
- ・乳幼児から青少年まで幅広い年齢層を対象とし、途切れない居場所としての機能を果たす
- ・地域の中で社会教育に関する窓口としての役割を担うことで、これまでつながることがなかったNPOなどのハブとなる
- ・子どもに関する専門性を持つNPOなどが中心となり、学校や地域住民、様々な専門性を持つ他のNPOを巻き込みながら運営を行っていく
- ・多様な主体をつなぐことができる人材（コーディネーター）の育成を図る

3. 具体的な事業

< 拠点づくりに向けた具体的なプロセス >

- ①社会教育に取り組むNPOや市民活動団体と行政担当者による情報交換の場づくり
- ②モデルケースとして複数のNPOと行政の協働による社会教育プログラムの実施
- ③青少年会館を始める拠点として、外部とのコーディネーションの事例づくり
- ④拠点となる場所の選定と確保、及び地域住人を巻き込むためのワークショップの実施
- ⑤運営にあたる方針の作成、事業内容の検討

< 事業例 >

- ・制限されることなく、自分の発意で遊ぶことができる居場所
- ・子どもが主体となり社会参画を促す「こどもの国」
- ・引きこもりや不登校になった子どもたちによるグループカウンセリング
- ・学年に関係なく学び直しができる「寺子屋」
- ・高校生、大学生が働くことや将来について語り合う「しゃべり場」
- ・地域のシニア層との交流にもつながる季節行事や昔遊び、伝統文化の体験
- ・自然体験や本物の文化に触れる体験などそれぞれのノウハウを持つ団体によるプログラム

4. 期待と成果

- ・産官学民がそれぞれの強みや資源を持ち寄り、子ども達の健全育成に向けてつながり合う拠点となる
- ・家庭や学校とは異なる、信頼できる大人との関係ができることで、日頃話すことができない悩みなどを受け止め、大きなトラブルになる前に予防することができる
- ・実際の運営は市内の大学生の参画を積極的に促し、学生にとっての学びの場となると共に、大人と子どものつなぎ役になる
- ・乳幼児から青少年に至るまで幅広い年代を受け入れ、地域に関わり続けるきっかけとなることで、次世代を担う若者の育成につながる

(市内の参考事例)



「野菊野こども館」

運営：NPO法人松戸子育てさぼーとハーモニー

町内会や市内の大学生，他のNPOとの連携を積極的に行っている

(写真は野菊野団地で行われた餅つきの様子)



「宿題寺子屋」

運営：NPO法人人材パワーアップセンター，NPO法人子どもっとまつど

市内の2団体が協働で，シニアが主体となって取り組んでいる子どもの居場所づくり

(写真は松戸市視覚障がい者協会の方が来ている様子)